

No. 1076

夏の終りに

涼を求め、水を求めて人々が集まる。海やプールはどこへ行っても満員だ。8月24日、東京・豊島区では今夏最後の盆踊り・花火大会が開かれ、大勢の人々が詰めかけた。園内は熱気がムンムン、踊りの輪も七重・八重と大きく広がっていく。クライマックスは夏の夜空を採る4000発の仕掛け花火、打ち上げられる度に歓声がわく。華々しい花火が消え、夏の祭典が終わる。広い海辺には過ぎゆく夏を惜しむ幾人かの姿がある。が、もうそこにはたしかな秋の気配がある。

原子力船「むつ」出港

日本初の原子力船「むつ」は、陸奥湾内漁民の反対を受け、青森県むつ市の母港につながれたまま、一年十カ月を経た。窮地に立たされた国は、8月21日「むつ」出港を閣議決定「8月25日出港」と発表した。

反対する漁民は、いっせいに立ちあがった。

——「むつ」が通っただけで、一千万円もの借金をして、やっと育てたホタテ貝が売れなくなる。我々漁民は首をつらなくちゃならない。

反対集会に立った菊地むつ市長は「国の原子力行政には、政治や経済はあっても、かんじんの安全対策が欠けている」と厳しく批判。

出港予定日の8月25日、森川科学技術庁長官を迎えて、午前8時25分から出港式が行なわれた。森山長官は「一部漁民の反対があるのは極めて遺憾である」と強気の姿勢をくずさず、強行出港の構えを見せた。

しかし、反対漁民の抵抗は強く、約三百隻の漁船が「むつ」のまわりをとりかこみ出港を阻止、また岸壁には青森県労会議約二千人が結集、漁船支援のシュプレヒコールを繰り返した。

こうして、出港予定を16時間遅れた26日午前0時45分シケのため漁船が避難したスキをつけて、やっと「むつ」は出港した。

安全が確立されていない原子力船の出港、あとに残された漁民の不安はどうなるのだろうか。